

42209

教科書文庫

4

810

42-1925

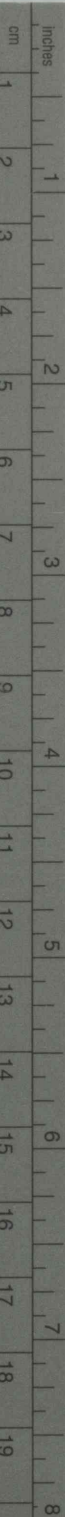
20000
65477

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

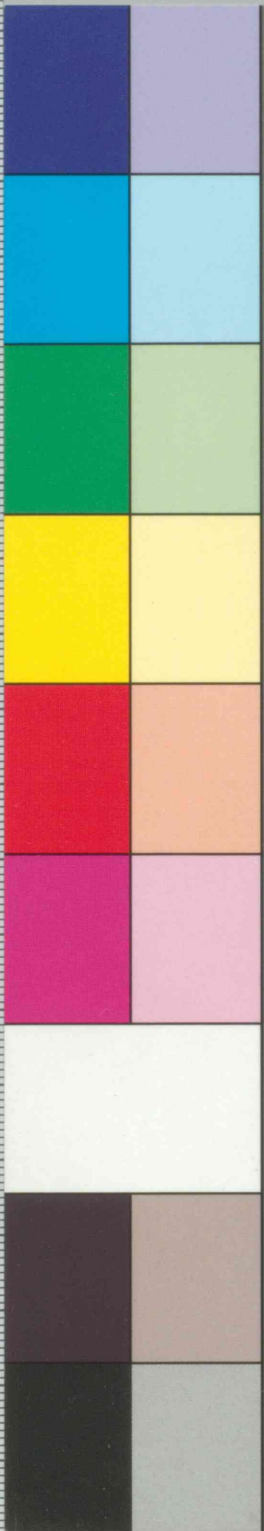
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



4b
810
大14

訂六女子國語讀本

卷六



資料室

大正十四年二月十八日
文部省檢定書
高等女子學校國語教科書

46
810
大14

女子國語讀本卷六

吉田彌平 篠田利英
小島政吉 岡田正美

共編

島大學
教
65477

金港堂書籍株式會社

訂六 女子國語讀本卷六

目次

一 田園雜興.....	大町桂月	一
二 果物の味.....	正岡子規	八
三 忘れがたみ.....	外山正一	三
四 動物園.....	芥川龍之助	三
五 日光の山路.....		元
六 茶道.....	姊崎正治	三
七 海の光.....	金子薰園	七
八 秋の月.....		四

目次

九	桃の嫩葉.....	上杉	治憲	翌
一〇	留守宅へ.....	細井	平洲	吳
一一	辯論術.....	兎
一二	武藏野.....	國木田	獨歩	五
一三	嶽雪.....	德富	健次郎	五
一四	富士の高嶺.....	五
一五	英獨佛の國民性.....	和田	垣謙三	六
一六	ヒマラヤ紀行.....	六
一七	椰子の實.....	島崎	藤村	七
一八	遠望.....	吉江	孤雁	七
一九	霧の倫敦.....	夏目	漱石	八

二〇	蓮月尼.....	鹽井	雨江	九
二一	吾妻路.....	阿佛	尼矣	九
二二	浮島原.....	義經	記	九
二三	高館.....	笹川	臨風	一〇
二四	本多重次.....	新井	白石	一七
二五	税所敦子君を誅す.....	高崎	正風	二三
二六	綾のみけし.....	二九
二七	鼎かづき.....	兼好	法師	三〇
二八	安元の火.....	鴨	長明	三三
二九	日蓮上人.....	高山	林次郎	三五
三〇	信.....	安藤	圓秀	四〇

三	蘭人の趣味……………	松本亦太郎	一頁
三	蛙の聲……………	長塚節	一頁
三	都に着きて……………	樋口一葉	一五
三	道……………	大西祝	一五

六訂女子國語讀本卷六

*名は芳衛
文章家。

一 田園雜興

大町 桂 月

みづから世を避けて門を鎖すにはあらねど、片田舎に住めば來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸さんには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到らず。音に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。汽車の便をかりて都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。穉兒飛來りて我が手の風呂敷包に縋る。例として土産の菓子有らんを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥かしけれ。

蒸暑き夏の夕べ、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上に迸る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今一つ、一

匹の犬いつも食時を違へず來りてかしこまる。これ近隣の家の飼へるものなり。その主人、近頃妻子を残して病死せり。喪家の狗のたとへ、思ひ出されて、あはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にかきたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水わきて流れて田にそゞぐ。もとは、朽木中に満ちて、蛙やるもりの棲處となり、岸には雜草生ひ茂りて見るかげも無かりしが、草を芟り、朽木を取除け、るもりを捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺む

るに、蛙もりのみと思の外、長さ一尺ばかりの黒鯉ありて
遊びめぐり、人の足音聞きては、穴深くひそみ行く。大兒と
中兒と之を見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに十
尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及
べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫き、或は集り或
は散じ、時には水面に唼喁し、時には空に躍る。かたばかり
の欄干ある獨木橋上に上ちてこれを眺め、これに餌を與ふ
ること、三兒にとりてはこの上もなきなきなり。
おぼつかなげに、と、と、と呼びて雞に餌を與ふことも、
亦小兒がなきなきの一つなり。家の四方に散在せる雞、こ
の聲を聞きて喜んで來り集まり先を争うて食ふ。雄三羽

雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一
羽、最も慄悍なり。餌を貪ること甚だしく、近よるもの、頭
を嘴にてつゝくさま、如何にも憎し。他の雞恐れて敢へて
近よらず。されど最も大いにして好き卵を生むは、このし
やもなり。

われ平生物累なきことを希ふ。一室の中、粗末なる机と書
物との外には、また他物なし。興來りて筆を執り、書を繙き、
興盡きて則ち臥す。雞遠慮なくも座に上り來り、机上に立
ちて啼くことあり。ごむ履はきて庭に遊べる小兒、いつの
間にか履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど雞
上らば追ふべきものと心得て、おのれは履にて上り居なが

ら、兩手ひろげて雞を追出すもいとあどけなし。末子は未だ口もきけぬ程の年頃なり。母の乳に飽けば、をりく我が机邊に来る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。所謂家庭の感化は自らかゝる中にあるべしと思はる。あまりおとなしきに、ふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることなごあり。可愛や、幼兒、清正の猿と相去ること遠からず。園中兒を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、とんぼなり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、只うれしきなり。

親を思ふ心にまさる親心、今日のおこづれいかに聞くらん。
吉田松陰。

支那の昔、戦國時代の趙の武將。

慾もなし、名利の念も無し。沈思して自然に對すれば、始は其の愛すべきを覺ゆ、終には其の敬すべきを覺ゆ。かゝるたのしき我が團欒にも、なほ一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や、齡古稀に近し。常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食少きを憂ふ。親を思ふ心にまさる親心」と詠じけん。世に子の病ばかり親の心をいたましむるものなし。罪ふかきかな。我もまた不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへ物するに至りぬ。食進むやうになりて、うれしとて母の喜ぶ様見るにつけても、覺えず涙ぐまれ

しこと幾度ぞや。(春草秋草)

二 果物の味

正 岡 子 規

*名は常規。俳人。明治三十五年歿す。

果物ほど味の高く清きものはあらず。小兒は之を好み、仙人も之を食ふとかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味言ひ難し。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。いちごは西洋いちごを善しとす。されど行脚の足くたびれて、草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰打据ゑて、汗を拭ふ手の下に端なく見附けて取り食ひたる、味は問はず、時に取りていと嬉し。神戸に病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲み得ぬに、わがためにと

*河東碧梧桐。高濱虚子。

て、碧虚二子の、朝なく、諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉をもたらしくれたる、いかばかり嬉しかりしぞ。



桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘きもののはなし。晝餉さへしたゞめずに貪りたる木曾の旅の思ひ出でられて、なつかし。夏蜜柑、ザボンの類、俗を離れて涼し。さして善しとはあらず、少し病みて飯さへえたうべぬ時など

またなきものとぞ覺ゆる。

梨は涼しくいさぎよし。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を



碑の規子岡正る在に市山松

披き片手にて團扇を持
ちながら一片を口にし
たる、氷にもまさりてす
がすがしうこそ。林檎
は北海の産を最上とす。
齒にさはれば形消えて

*西王母、漢の武
帝に仙桃をす
めた。

すゝやかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも
似たらんか。桃には種類多し。善きもあり、悪しきもあり。
*王母後園の風味は知らねど、總べて桃は世にへつらはぬと

ころに一段高き趣あり。

甜瓜・西瓜ひなびたれど誠あり。捨て難し。葡萄は甘から

ず、澁からず、人に媚びず、さりとして世に負かず、君子の風あり。

栗は賤し。甘藷とくらへられたるも口惜し。柿は野氣多

く、冷かなる腸を持ちながら味はいと濃やかなり。多血性

の人、世を厭ひて里に隠れながら、猶物に觸れて熱血を迸ら

すにもたとへんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。石

榴・無花果のわれから裂けたるは喰ひ劣りぞする。

われ此の夏頃より、わけて果物を貪り、物書かんとすれば必

ず之を食ふ。書きさして倦めばまた之を食ふ。食へば則

ち心すゝしく氣勇む。氣勇めば則ち想涌き筆飛ぶ。われ

力を果物に借ること多し。

日毎々々、十顆の梨を食ひけり。

朱硯に、葡萄のからの散亂す。

柿くうて、洪水の詩を草しけり。(子規隨筆續篇)

三 忘れがたみ

外 山 正 一

*東京帝國大學總長。文部大臣。文學博士。明治三十三年歿す。

風の音だに聞えず、いと靜かなる冬の夜の星月夜なるは、何となくあはれなる心地せられけり。

夜の更け行くまゝに、行通ふ人も次第にとだえ、庭に鳴く露の命の蟲の音は、絶えくゞにこそ聞えけれ。

丑三つにはなほ程あれども、晝のかせぎに疲れたる賤の身

は、手足を伸してはや熟睡^{まど}せるも少からず。

明日の竈の細き煙は、立つや立たずと行燈の暗き影にて、繰返し繰返し僅かなる賣溜の錢を數ふる夫婦の者あり。

乳呑兒に乳房を吸はせ、背^せを叩きて寐させつゝ、子の行末を案じ煩ひ、夜のふけ行くを知らざる親あり。

神に願かけ、佛に祈り、藥よ、灸よと手に手を盡し、我は死すとも最愛の子の命をば助けんと心を碎きし甲斐もなく、命數己に盡きしにや、玉の緒の絶えて果敢なく消え失せし子となきがらに抱きつきて、今ははや此の世に生くる甲斐もなしと、よゝと泣入る母親あり。

百年の後までも老いたる親に孝行盡し、海より深き大恩に

行末永く報いんと誓ひしことも水の泡にて、まだ萬分の一だにも盡さぬうちに、親ははや歸らぬ旅に門出したれば、夢かとはかり思へども、さてあるべきにあらざれば、泣くく湯くわんをなし終り、戀しき親のなきがらを、今や柩に斂めんと氣を勵ませど、若者はせきくる涙せきあへず只茫然としてたゞずみたり。

蝶よ花よと掌の中の玉の如くに育てたる一人娘の明日はめでたき婚姻にて、その喜と支度のために家内は上を下への騒、父母は疾く今日の夜の過去りて明日の來るを待兼ねるに、おぼこ氣の恥かしさにて何事をなせども更に手につかず、寢ても寐られぬ娘あり。

明日は主君の面前にて、佞人ばらの悪事を發き、事宜によりては刺違へ、我も共々相果てんと、忠義の覺悟は金鐵にて、只一心に君の爲を思うてねたばをあはする武士あり。

實に人ははかなきものなり。今日の夜はまだ過去らざるに、ひたすらに明日・明後日のことにのみ、とかく心を移しがちにて、如何なる天の災が、すぐ眼前に迫ればとて、一寸先は闇の譬、明日ともいはず、今宵のうちに、深き淵瀨に陥らん身とはつゆ知らずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

風なく、雨なく、いと靜かなりし冬の夜は、忽ちにして奈落の底を見るに至れり。

泣く者も、笑ふ者も、喜ぶ者も、怒れる者も、舞ふ者も、歌ふ者も、

樂しむ者も、齊しく一度に聞きたるは、地底に聞えし大山の崩るゝばかりの響なりけり。

すさまじき勢にて、大地は下より突きあげられ、地上はさながら激浪おほなみの打つが如くに震ひ動けり。

安政二年十月二日、時刻は夜の亥の刻かとよ。地裂け、天墜つるかど驚かれたり。

見る／＼百萬の人家・倉庫・神社・佛閣倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦にうたれて死せるもの、幾許なるかを知らず。一時に落來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣叫ぶ老若男女の聲に和して、譬ふるにもあらずりけり。暫くして、地の震やゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、

あとに残りて聞ゆるは、親を呼ぶ子の聲なり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞ゆるは、次第々々に細くなる「助けてくれ、助けてくれ」の聲なりけり。

理なるかな、梁に壓さるゝ者あり、柱に挾まるゝ者あり、土に埋めらるゝ者あり、壁にしかるゝ者ありて、さらぬだに苦しむ者は多かるに、地のふるふこと未だ止むか止まざるに、四方の天は一面に、次第々々に明るくなりて、さながら晝の如くなりしは、處々方々の潰れ家より、火の炎々と燃出でて、焔の天を焦すなり。

家に潰されて、身は動かず、悶え苦しむその處に、燃來る火の

ために、煙に咽び、熱さに耐へかね、遁れんとしてあせれども、遁るゝこと叶はねば、聲を限に叫べども、助に来る人はなく、無間の地獄、阿鼻の熱、無慙といふもあまりありけり。此の夜わづかの時の間に死したる人のその數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いとも哀なる死にざまのものも多かりけり。運強くして、不思議にもその身は萬死を遁れたれど、親、兄弟の無慙の死をそゝろに悲しむ者もありけり。枕を並べて臥し居たる夫婦にてありながら、夫は梁に壓潰されしが、妻はねだの抜けたるために下に陥り、不思議にも命を助かりたるもあり。

梁に敷かれし我が妻を助け出さんとあせれども、力及ばるその内に、あたりは一面火になりて、見すゝ妻の焼け死ぬるを殘して去れる夫もあり。妻子は如何になりつると崩れ家を取除け見れば、こは如何に、妻は穴藏に半ば埋まり、片手には稚兒わらわの足をつかみ、うらめしげなる顔つきにて色さめて死せるもありたり。されば此の夜の不運の者には、或は祝の席に於て、或は悲の最中に、寐耳に水に死せるなど、語るもあはれなる者ありしが、これらは人の身の上なり。我にも此の夜の話あり。父は此の夜は宿直まの番にて、家を守り三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は母の左右に寝ね、末さいるは乳

母に抱かれて、枕邊に臥しゐたりき。あるまじきことなれども、すは、地震よ。といふとひとしく、乳母は抱きし子を捨て、我のみ外へと逃出てたり。母は啼く子を抱き上げ、右と左に寝たる子をゆり起さんとあせれども、稚兒を抱へし身にて、大浪にゆらるゝ如く動きつゝ、片手に起す左右の子は、冬の夜の寐入りばなとて、起せども起せどもいつかなく、起くればこそ。うつゝにて母に連れられて、外へ出でたる時は、地のゆるゝも止みしあとにて、四方の天は、火事にて既に眞赤になり居たり。實に危かりしは我々親子の命なりけり。そも安政の地震には、水地なる舊家の潰れぬものは稀なりしが、我等が住ひ

し舊家も、潰れぬばかりに傾きたり。今において想ひおこすも、身の毛のよだつは此の夜の事なり。此の地震にて、我等が家のもしや潰れもしたらんには、我が兄弟は死したりとも、誰をも恨むべきならねども、もし母の死したらんには、我等が罪にてありたるならん。さりながら、此の夜もし我等親子が死したりせば、何故、母が死せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを、子の爲に死せしなりとは誰か知るべき。今もなほ忘れざるは、久しき昔の此の夜のことなり。實にありがたきものは母の愛なり。母は其の身の危きをも顧みずして、一心に子を助けんと爲しゝものなり。

實に深きは、親の恩なり。われに今日あるはこの愛を以て育てくれたる母ありたるが爲なり。我は自ら知らざれども、我が母が此の夜の如くに、其の身の危きをも顧みずして我々の身をば護りくれたるは幾度なりしか知られざるならん。

此の夜のごとは、亡き母の、われには忘れがたみなり。此の夜我々親子より運拙くして死せるものには、助かるべきを子の故に死したる母は幾許なるらん。此の夜の事は、亡き母の、我には忘れがたみなり。此の夜の如き天災の若し今日の夜に起らんには、助かる命を子の爲に棄てんとする母親は幾許なるか知らざらん。實に深き

は親の恩なり、忘れ難きは母の愛なり。(新體詩歌集)

*文學者。

四 動物園

*芥川龍之助

鶴の鳥

あの頸をさ、襟飾のやうに結んでしまつたら、一體鶴の鳥はどうしてほごく氣なんだらう。

カンガルウ

腹の袋の中には子供が一匹はひつてゐる。あれを出してしまつても、まだ英吉利の國旗か何か、手品のやうに出て來はしないかしら。

鸚哥

お前は古い唐畫の桃の枝に、じつと止つてゐるが好い。う
 つかり羽搏きでもしようものなら、體の繪の具が剥げてし
 まふから。
 猿よ。お前は一體泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐる
 のか。お前の顔は悲劇の面のやうで、同時に又喜劇の面の
 やうだ。私の記憶は緣日の猿芝居へ私を連れて行く。櫻の
 釣板、張子の鐘、それからアセチリン、瓦斯の神經質な光。お
 前は金紙の烏帽子をかぶつて、緋鹿子の振袖をひきずりな
 がら演技するのである。私の胸に始めて疑團が萌したの
 は、正にその演技中のお前の顔へ、偶然の一瞥を投げた時だ。

悲劇的喜劇役者。

京都の畫家。人
物・山川・草花・
鳥獸を巧に描く。
寛政十二年歿す。
年八十五。

お前は一體泣いてゐるのか。それとも又笑つてゐるのか。
 猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。私はお前程巧妙な
 トラヂック、コメデアンを見た事がない。——私の心の中で
 斯う呟くと、猿は突然身を躍らせて、私の前の金網にぶら下
 りながら、癩高い聲で問返した。「ではお前は？え、お前の其
 のしかみ面は？」

鴛鴦

胡粉の雪の積つた柳、銀泥の黒く焼けた水、其の上に浮かん
 である極彩色のお前たち夫婦。——お前たちの畫工は伊藤
 若冲だ。

鹿

この見事な刀掛には、葵の御紋散らしの大小でも恭しく掛けて置くが好い。

日本犬

造り物の柳に灯入りの月が出る。お前は唯遠くて啼いてゐれば好い。

南京鼠

上衣は白天鷺絨、眼は石榴石、それから手袋は桃色繻子。――お前たちは皆可愛らしい、支那美人そつくりだ。後宮の佳麗三千人と云ふと、私は何時もお前たちが、重なり合つた樓閣の中に、巢を食つた處を想像する。そら西施が芋の皮を嚙つてゐると、楊貴妃は一所懸命に車をまはしてゐるぢや

白樂天の長恨歌中の句。

支那越王勾踐の寵姫。

支那唐の玄宗皇帝の寵姫。

ないか。

鷺

祥瑞の江村は暮れかゝつた。藍色の柳、藍色の橋、藍色の茅屋、藍色の水、藍色の漁人、藍色の蘆荻。――すべてが稍黒ずんだ藍色の底に沈んだ時、忽ち白々と舞ひ上るお前たち三羽の翼の色。――皿の外までも飛出さなければ好いが。

金魚

薄日の光が射して來ると、藻に立つた秋も目立つやうになつた。私は、――處々鱗の剥げた金魚は、やがてこの冷たい水の上に、屍を曝す事になるかも知れない。しかしさういふ最後の日までは、やはり先の切れた尾を振りながら悠々

伊勢國飯高郡大口村の人で、陶工。青花白地の磁器を造る。永正頃の人。

と泳いでゐようと思ふ。

蒼鷺

何でも雨上りの葉柳の匂が、川面を蒸してゐる時だつた。お前は其の柳の梢に、たつた一羽止まつてゐたが、夕焼け、小焼け、あした天氣になあれ。——そんな唄を謡つて通つた子供の時、私を覚えてゐるかね。

金絲雀

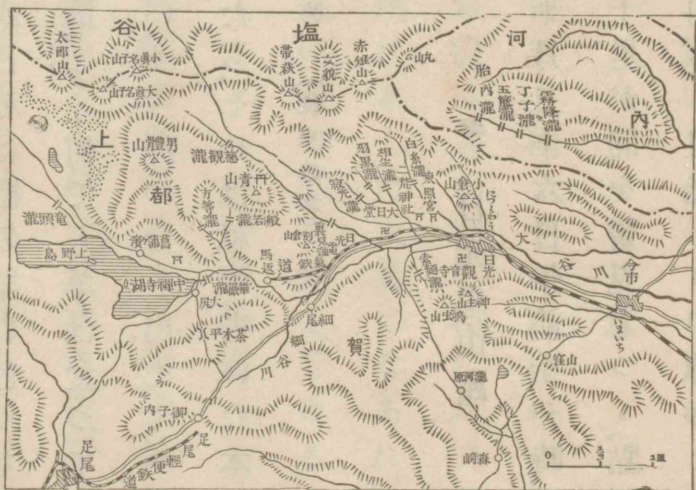
理髮店の店さきには、朝日の光が爽かに、萬年青の鉢を洗つてゐる。 鉄の音、水の音、新聞紙を擴げる音。——その音の中に交るのは、籠一杯に飛びまはるお前たちの囀り聲、——誰だね、今親方に挨拶した人は？

羊

或日私は檻の羊に、色々な本を食はせてやつた。 聖書・唐詩選、——何でも羊は食つてしまふ。 が、その中にたつた一つ、いくら鼻の先へ出してやつても食はない本があると思つたら、それは私の書いた本であつた。 覚えて居よ。 綿細工め。 (夜來の花)

五 日光の山路

十月二十六日午前十一時、上野發の列車にて、小春の田舎三十里が間を瞥見しつゝ、點燈ごろ日光に着き、翌日、中禪寺に向ふ。 日光より中禪寺まで三里、半途の清瀧までは所謂山



日光の山路

舒水緩の境にて、他の奇なし。清瀧より足尾街道と岐れて右折し、始めて山間に分けいり、馬返の山村を過ぐれば、路高峯の間に入りて、頭上の青山誠に窄く、大谷川雷の如く脚底に吼ゆ。此より中禪寺湖に到るまでの一里は、錦繡の山なり。漆山柿・樺・櫻等燃えに燃えて、黄焰紅火眼もあやに、松・檜縦などの絲のちらほらと入交り

たるも一入の眺なり。谷を流るゝ大谷川は石に激しては白雲を散し、淵を湛へては紺碧を染む。巖より巖にわたす獨木橋を岩魚釣る男が魚籃提げて行くも、其の儘畫としてべし。路は山色水聲の間を通じて、一步々々仰ぎ上る。ふと、頭を上ぐれば、夕陽火の如く右側の諸峯に當りて、半峯以上は赫として燃えんとするに、左側の諸峯は落暉に背いて薄紫に暗み、有りとも見えぬ山腹の炭焼小屋より一條の白煙縷々として立上る。華嚴の下流と方等の下流と落合ふ邊にて、金髮碧瞳の西洋婦人の籐椅子に乗りて下り來るに逢ふ。夫なるべし、其の後より鬚髯うるはしき西洋紳士の逞しき栗毛の馬に乗りて來る。更に上る程に、一曲の俚歌頭

共に瀧の名。

上に起りて、坂を曲れば、歌の主なる十二三の小娘が炭負へ
 る馬をぞ追來る。赤襟襦袢に白手拭を被り、草鞋・股引・手甲
 の姿甲斐々々しく、馬背に一枝の紅葉を挿したるなど、晝に
 も歌にもしたき風情なり。
 方等の瀧見茶屋を過ぎてよりて、何人にも逢はず。木間越
 しに光れる夕日の山は薄れ行きて、夕霧谷間より這ひのぼ
 り、蒼然として暮れかゝる。何處ともなく響く瀧の音、我が
 踏む落葉の音の外には、何もなく、秋山の黄昏いと、身にし
 む。詩なご吟じつゝ、行く程に、羊腸の坂盡き、疎林開けて一
 面の明鏡白く夕暗に光れるを見る。中禪寺湖の我が前に
 展開せるなりき。この夜は湖畔の宿に水禽の夢穩かに眠

りぬ

翌日は華嚴の壯觀に接して心目を駭かし、それより山を下
 りて日光祠に詣づ。人工の美亦捨て難くはあれど、自然の
 美を擅に眺めし身には何となく飽かぬ心地して、匆々に看
 過しぬ。(青蘆集に據る)

六 茶道

姉* 崎 正 治

茶の湯は、最も質素で而も最も趣味の深いものゝ、一てせう。
 それは、金殿玉樓の仕事でなく、萱ぶきの四疊半で、一つの爐、
 一つの釜、粗末な茶碗で一杯の茶を飲むだけの仕事である。
 今日では茶道に色々の形式が出来、又その設備も一種の數

*
 哲學者。
 文學博士。
 東京帝國大學教
 授。
 朝風と號す。

寄贅澤の様になつて居ますが、元來は決してその様な性質のものでない。成るべく人工を加へない、天然の儘の樂み一杯の茶に求め、そこに人々が心の隔てのない集りをするものが根本の精神。またその道は單に娛樂でなく、茶室の中には悠遠な人生の趣を觀じ、湯の煮える颯々の音にも松風の天籁をきいて、こゝに茶道といふ一つの道、天然と人生との奥を味ふ道が成立つたのであります。戰國の世に、外には殺氣が充ち、國は兵戈の衢となつてをる間にも、茶室の四疊半には治外法權の平和があり、戰陣の駈引き、武術の練磨の間にも、茶室の爐を圍んで、そこに寂靜の世界が出來たのは、實に茶道の賜でありませんか。出でては、外交に奸

策を弄し、戰場に詭計を用ひる英雄も、茶室の中には入つては、全く天然の兒となり、一輪の活花に宇宙の美を勸請し、茶筌の先に良心のさゝやきを聞いた。或武士が茶室に敵將を闇打させようとしたが、彼が悠々萬事を忘れ、一心風流に心を籠めてをる様を見て、此の如き人を闇打ちするのは、卑怯であると悟り、實情を明して罪を謝し、そして自分も茶道に入つたといふ。此は話の様な話ですが、茶道の眞趣味はこゝに現れて居るといつてよろしい。此の様な高雅の心は實に四疊半の中に養はれて居たのであります。近頃、井伊大老の事蹟を研究してをる人からきけば、大老の精神修養は中々一朝一夕の事ではなく、宗教の上にも中々の

*井伊大老直朝。

信念のあつた人で、又茶道では一派の宗匠開祖であつたといふ事です。大老の考では、茶を立て、人を請ずるのは人生の大事である、一杯の茶にも人生の眞味を味ふべきである。



井伊直弼

それ故、茶を立てる時には、その度毎に此が一生に一會の大事であるといふ覺悟を持たなければならぬ。客の辭し去つた後には、さてこの大事を終つた、無常迅速、何時自分の命が亡くなるか知り難い、尙一回自分一人で茶を楽しもう、とかう覺悟するが茶道の極意である。大老はこの様な考からその茶道を一會流と名けら

れたといふ事であります。さすれば大老が萬難に當つて、開國の大事を執行した精神は、四疊半裡の修養に得たものといつても差支はないでせう。茶一つでも、決して今日の所謂茶人の物好きとして棄て、おくべきものでない、この平凡で簡単な娛樂の中にも、我々は如何なる修養をもなし得るではありませんか。(光あれ)

七 海の光

金子 薫園

今日は一天麗らかに晴れて、海は紺青を流すやうに平にないでゐる。白砂の上にならび立つ青松の根もとを洗ふ波の音も、ゆるくのごやかである。白い砂は何處までも續い

*名は雄大郎。歌人。

て、青い松もそれに伴つて立ち連つてゐる。松と松との間に處々漁家らしい藁屋が點在してゐる。其の一軒から晝餉の煙が白くあがつてゐる。廣い、はてしもない海原を控へて、其の細い一すちの煙が、いかにもはかなげに、別に離れて見えてゐる。やがて家の中から五六歳の小兒が出て、紺青の海を眺めた。其の一すちの白い煙はこの小兒の出現と共に、離れたものと見え、なくなつた。小兒はやがてしやがんで、すぐ前の貝をいちつてゐたが、それにも倦んだらしく、又廣い海原をながめ始めた。小兒の眼の前遠く、白い帆の影が見えた。小兒は手を舉げてそれを招くやうなさまをした。小兒はつゝいて聲を出

して、今度はほんたうにそれを呼んだ。呼べばすぐに向ふへその聲がとゞいて、其の白帆がちきに此方へ来るやうに思つたのだらう。小兒は聲のかきり呼んだが、白帆は依然として沖遠く見えてゐる。走つてくるのか、止つてゐるのか、分からぬ。

小兒は其の白帆を呼ぶにも倦んで、白砂の上を駆け出した。日は暖かで、小兒の額のあたりは汗ばんで來た。いつしか白い犬が出て來て、其の小兒と共に走つてゐる。犬も小兒も疲れて、松の根もとに休んだ。其の松は並んで立つてゐる中で、一本きはだつて高い。其の松の頂邊で不意に鷗が啼いた。小兒も犬も一度に其の鷗を見た。鷗は其の下に

小兒のあることも犬のあることも知らないらしく、又啼いた。小兒は自分達の存在を無視してゐるやうな鷗の態度か癢に觸つたか、小さい兩の手に全身の力を籠めて其の松の樹をゆすらうとした。無論松の樹は搖ぎさうにも無かつた。犬は小兒の後に黙つて見てゐる。

鷗は又啼いて、羽ばたきをして、今度は海の方へ飛んで行つた。藁屋の方から、晝飯を告げる聲がすると、小兒はあわてて其の家へ駈け込んだ。

油を流すやうな紺青の海は、日に輝いてゐる。白帆が又一つ殖えた。矢張り動いてゐるのか、止つてゐるのか、わからない。白い犬は波打際に揚げられた藻の香を嗅いでゐる。

小兒の家から啣へ烟管した老翁が出て来て、一寸海の方を見てゐたが、そこへ蓆を敷いて、網をすきはじめた。いつしか鷗が五六羽飛んで来て、此の老翁のほとりに遊んでゐる。老翁はこれに目もくれないで、馴れた手つきで網をすいてゐる。

海の光は輝きを増して、並び立つ此の磯の松の一本々々を照り返す。此の光の世界の中に網をすいてゐる老翁と五六羽の鷗とが、思ふさま光を浴びて動いてゐる。すると、彼の小兒の姉らしい少女が出て来て、老翁の肩をしきりに搖ぶつたが、老翁は何とも言はなかつた。少女の髪の毛は赤茶けて、顔は潮風に黒いが、眼の涼しい鼻の高い、きりつとし

た顔立ちをしてゐた。老爺が黙つてゐるから、少女は前よりも烈しく肩を揺ぶつたので、やつと少女の方を見る。少女が何か手眞似をすると老爺は首肯いて家に入った。少女は啞であつた。老爺も去り、鷗も去つたあとの光の世界を獨占してゐるものは、啞の娘であつた。娘は薄倖な身をつゆ嘆つやうな様子もなく、伸々とした顔附をして、松の樹に背を凭せたまゝ、輝く海を見てゐた。(青流)

八 秋の月

皆人の晝寐のたねや秋の月。
順禮の棒ばかり行く夏野かな。

重頼
貞室
真徳
季吟

言水

宗因 □ 來山

これはくくとばかり花の吉野山。 貞室

一僕とぼくくありく花見かな。 季吟

木枯のはてはありけり海の音。 言水

白露や無分別なるおきごころ。 宗因

三味線も小唄も乗らず梅の花。 來山

九 桃の嫩葉 上杉 治憲

*米澤藩主、鷹山
ご號す。文政五
年卒す。

女子は我が家を出でて夫の家を家とし、我が父母を離れて夫の父母を父母とするものにて、孝貞の二つこそ婦道の第一なれ。孝とは舅姑に事へて敬愛を盡すをいひ、貞とは夫に事へて節操を正しくするをいふ。孝子深愛の心あれば

必ず和氣あり。和氣あれば、必ず愉色あり。愉色あれば、必ず婉容あり。舅姑をいとほしく大切に思ふ心深ければ、相



上杉 山

對したるとき、自然と氣和して、違ひ戻ることなきものなり。其の氣和げば、おのづから顔色もにこやかになり、顔色にこやかなれば、自ら身の起居振舞もしとやかにして、能く物に順ひて逆ふことなきものなり。

されど、これらの事、眞實より出づるにあらずしては、こしらへものにて、一朝一夕のごとくすとも、つひにはその僞も

顯れて、舅姑にも見限らるゝぞかし。若し、眞實の誠だにあらば、當時行届かぬことありとも、これもまたいつしかその誠顯れて、舅姑をも感ぜしむべきなり。「聲なきに聽き、形なきに視る。」といふ。誠よりするにあらずしては、何ぞ得ん。女は、人に適きては、終身我が父母に事ふるものにあらざるを、人情として我が父母をのみ慕はしく思ひ、又、生れしより見習ひ聞習ひたれば、我が家の事のみ善しと心得る故、舅姑夫への事へかたも疎かになり、家事も我が家の風にもみなしたくなるより、人々の心にも違ふなり。己にその家に嫁する上は、何事も舅姑夫の命を承りて、その家風に従ふべきなり。かく云へば、女子は我が父母へ孝を盡すことはならぬやう

なれども、さにあらず。他門に嫁して、舅姑に善く事へ、夫婦の間も睦まじく、子孫繁榮するを見ば、我が父母の心にては、いかばかりか嬉しからん。孝は父母の心を悦ばしめ、安んぜしむるに如くことやはある。我が父母の嬉しく安んじたまふやうに舅姑夫へ事ふること、これすなはち我が父母へ孝を盡すなり。(桃の嫩葉)

二 留守宅へ

細井平洲

刈安賀村に三輪と申候百姓の妻有之五十七歳になり申候。夫は病身に御座候うて二十五の時より床に就き居申候、今年六十四歳になり候由。三輪、十八歳より

(一) 名は徳民、尾州侯の儒官。嘗て上杉治憲の師となつた。享和元年歿す。
(二) 尾張國中島郡にある。

病夫を大切に致し、貞節を立て候間、近邊にて貞女の名隠れなく候。呼出し逢ひ申候へば、有難がり泣き申候。やがて上よりも御褒美有之候はんと存候。誠に珍しき貞節に候。しをらしく俳諧をよく致候。拙者へ發句をくれ申候。

かへり花咲くや、日の恩、土地の恩。

と致しくれ申候。手もよく書き、處の娘ごもへ指南致申候。三輪が弟子になり候娘ごもは水際立つて行儀正しく候由、處の者共吹聴致候。拙者も感心の餘り歌を詠み遣し申候。

雪をはらふ嵐の風のさむけきに

松のみごりの色もひとしほ。

是は三十餘年夫に事へ貧苦艱難を致候故、貞女の操も
愈、顯れ申候との心にて候。おみほへ御聞かせなさる
べく候。扱々御徳の有難き、士民の女房まで道を守り、
やさしき女も追々あらはれ、誠によその國にはなき事
どもに候。子供怪我させぬやうよく／＼御申附なさ
るべく候。めでたくかしこ。

十月二十一日

平 洲

おさめどのへ

今年は大分年もとり、氣もくせくと致候へども、在
郷に參り、人々の善くなりたる様を見候へば、額の皺

も大分伸び、氣もわかくなり申候。

二 辯論術

むかし、希臘に辯論術を教へる先生が有つた。一人の弟子
が其の門に入つて學んだ。業成つて去るに臨んで、先生に
向つて、永年御教育下さつた御禮に金若干を差上げたいと
思ひますが、只今は少々手都合が悪うございますから、半金
だけ差上げて置いて、あとの半金は私が他日法廷に出て、最
初の訴訟に勝つた時に差上げることに致しませう。といつ
て、しかと約束をつがへて別れた。然るに、其の後弟子は一
向にあと金を持つて來ず、一二度催促して見たが、お約束の

通り、法廷で訴訟に勝つたら、その時に、といつて少しも應じない。そのみならず、故らに法廷に出るのを避けて居る様にも見えたので、先生は大いに怒つて、遂に弟子を相手取つて謝儀請求の訴訟を起した。

さて、法廷に於て師弟顔を見合せた時、先生、弟子に向つて、このおろか者よ。判決はどうならうとも、お前はわしに謝儀の後金を出さねばならぬぞ。若し判事がわしに勝を與へられたならば、お前はその判決に従つて、わしに謝儀を出さねばならぬ、又、若しお前が勝つたならば、お前は、豫ての約束によつて、やはり、わしに謝儀を出さねばならぬ。」といふと、弟子はこれに答へて、賢明なる先生よ。判決はどうならうと

も私は先生に謝儀を差上げるに及びません。若し判事が私に勝を與へられたならば私は、判決に従つて、先生に謝儀を差上げるに及びません、又若し先生がお勝ちになつたならば豫てのお約束によつて、やはり私は謝儀を差上げるに及びません。」と答へたといふ。

二三 武藏野

國* 木田 獨歩

昔の武藏野は萱原のはてもない光景であつたやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。その木は重に檜の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。その變化が

*名は哲夫。文學者。明治四十一年歿す。

秩父山以東十數里の野に一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ
て、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑陰に、紅葉に、様々の
光景を呈する。その妙は一寸西國や、東北地方の者には解
りかねる。元來、日本人はこれまで楡の類の落葉林の美を
あまり知らなかつた。林といへば、重に松林のみが日本の
文學・美術のうへに認められて居て、歌にも楡林の奥で時雨
を聞くといふやうなことは頗る稀である。
自分は屢思つた、もし武藏野の林が楡の類でなく、松か何か
であつたら、極めて平凡な變化に乏しい、色彩の一樣なもの
となつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。
楡の類だから、黄葉する。黄葉するから、落葉する。時雨が

囁く。木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬
の木が葉が高く、大空を舞うて、小鳥の群のやうに遠く飛去
る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に亘る林が、一時に裸
體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一
面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音
が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奥に坐して、四顧し、傾
聽し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲニエフが林間の晩秋
を描いたものにも、坐して、四顧して、そして、耳を傾けた」とあ
る。この耳を傾けて聞くといふことが、ごんなに、秋の末か
ら冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。
秋ならば、林の内から起る音。冬ならば、林の彼方に遠く響

*
露國の文學者。
1818—1883

く音。鳥の羽音囀る聲。風の戦く、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすたく蟲の音。空車、荷車の、林を廻り、阪を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音。是は騎兵演習の斥候か、さもなくば、夫婦連で遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつてゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣のエで、だしぬけに起る銃音。時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から、和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、又、林を越えて、しのびやかに通り過ぎる音の、如何にも幽かで、又、鷹揚な趣があつて、優しく、懐

ついでに
東京の近郊

かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は、嘗て、北海道の深林で、時雨に遭つた事がある。人迹絶無の大森林であつたから、その趣は更に深いものがあつたが、そのかはり、武藏野の時雨の、人懐かしく囁く様な趣はなかつた。秋の中ごろから冬のはじめ、試に中野あたり、或は、澁谷・世田が谷、または、小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲をやすめて見よ。それ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風もなきに落ちてかすかな音をたて、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな野分が、すさま

じく林を渡る音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は、この物凄い風の音の忽ち近く、忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつづけたこともある。

林に坐つて居て、日の光の最も美しいのを感じるのは、春の末から夏の初で、その次は黄葉の季節である。半ば黄色に半ば緑な林の内を歩いて居ると、澄渡つた大空が梢々のあひ間からのぞかれ、日の光は風に動く葉末々に碎けて、その美しさはいひ盡されぬ。日光とか、碓氷とか、天下の名處はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に、一面に火花を放つ有様は、是また武

藏野の特異の美觀ではあるまいか。(武藏野)

一三 嶽雪

徳富健次郎

富士雪を帶ぶ。さやかに雪を帶ぶ。

秋空何ぞ高き。風威を帶ぶる相模灘の怒號何ぞ壯なる。

此の空と此の海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

絶頂より五合目の邊まで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹縁をとれるが如く山を包む。

雪色淨うして點塵なく、日光に輝き、水よりも澄める晩秋の



一四 富士の高嶺

空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波
 雪の如く立騒ぐ相模灘を俯瞰し
 て、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ゆ。
 嶽頂一點の雪、實に富士の秀色、神
 采を十倍せしむるのみならず、更
 に四圍の大景に眼睛を點ず。東
 海の景は富士によりて生き、富士
 は雪によりて生く。

(自然と人生)

水戸徳川家二代
の主、元祿十三
年歿す。

江戸に住み、縣
居と號す。明和
六年歿す。

伊勢松阪の人。
眞淵の門人。鈴
の屋と號す。享
和元年歿す。

たちれらぶふりそりてあれあさつしま

徳川光圀

わづらひ本のうげのつらねよ

賀茂真淵

ふだひぬのうもをいでゆく雲は

あつらひぬのうもをいでゆく雲は

本居宣長

あはまがらや雲居もゆるひをむらを
 ちよぶぞとてあはまがらや雲居もゆるひをむらを

江戸の人。眞淵の門人。文化五年歿す。

江戸の人。眞淵の門人。文化八年歿す。

武藏秩父郡保木野の産。文政四年歿す。

加藤子彦

うぐのぬを木ねまゝにかかりみて

ねねがうむうきうきうけう

和田春海

こゝろあてゝアハハ言はふとて

ねねはわろろよはろろうがね

塙保巳一

こゝろのねよばねまにまゝとみねも

なうろくさうやゆきのうぐのぬ

歌學者。歌人。京都に住む。天保十四年歿す。

*經濟學者。法學博士。英文學者。東京帝國大學教授。大正八年歿す。

香川景樹

うぐのぬもうもといつてくむらも

なうろくさうりよかすむきうれ

一五 英佛獨の國民性

*和田垣謙三

個人に個性あるが如く、國民には國民性あり。或はこれを國民心理ともいふ。茲に英・佛・獨三國民の心理的特色を髣髴せしむる一話あり。

今試に「象は如何なる動物なるか」といふ問題が英・佛・獨人に課せられたりとせよ。英人は倉皇旅装を整へて印度或は

阿弗利加等象の産地に赴き、實地にその生ひ立ちよりの生活状態等を目撃して精細に之をノートブックに記入すべし。その記事は或は前後し、或は錯綜して要領を缺く點なきにあらずといへども、その材料は確にこれをその本源より蒐集し來りしものにして、事實において誤なく、また些の想像臆説をもその間に挿まざるなり。

佛人は即ち早速動物園を訪ひ、そこに繋げる一頭に近寄り、尺度を以てその身體各部の寸法など丁寧に測り、又筆を執つてその形體・色合を巧に描寫し、而して極めて巧妙明確にまのあたりこれを見るが如くその體格・資性・習癖等を書き連ね、行文流暢理路整然たるべし。

獨人は如何。彼は全然筆法を異にし、他の英・佛兩人の答案の出來上るを待つて、始めて着手す。即ち辭を卑うして兩人に答案の借用を懇望し、これを得るや、書齋に閉籠り、兩答案を机上におきて左顧右眄、まづ佛人の答案より意見の大意を抜き寫し、更に英人の答案よりこれを説明證明する材料を求め來りて、比較的批評的の一文を物し、これに自家の理論を附加して、英人の答案にも、佛人のにも見る能はざる、しかも論據材料は英・佛二人の答案中に存する一種編纂的の答案を作るべし。

要するに、英人の答案の特色は動的なるにあり。而して長所茲にあり。短所亦茲にあり。佛人のは靜的なるにあり。

而して長所茲にあり。短所亦茲にあり。獨人のは即ち動
靜並に備り清濁併せ呑むにあり。而してその長短また同
じく茲にあり。(吐雲録)

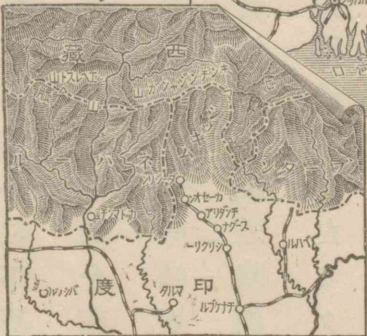
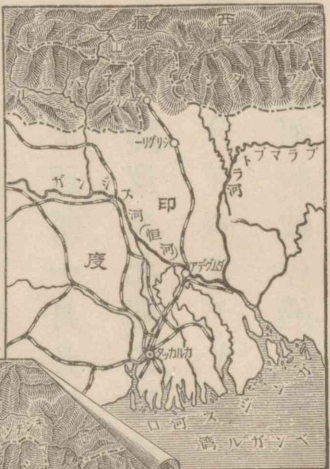
一六 ヒマラヤ紀行

ヒマラヤの四十八大峯その高さ何れも我が富士山の二倍
あり。エベレストは世界第一の高峯にて、直立二萬九千九
呎に達す。餘脈は姑くこれを措き、其のヒマラヤ本系と稱
する者、東西二千哩、印度大半島の北部を劃する大障壁とな
りて、絶えず印度洋面より吹送る熱帯の水蒸氣を雪となし、
雨となし、以てブラマプトラ・ガン・グインズスの三流を其の

南側に吐出す。世界最豊饒の平原これが爲に生じ、世界最
古の文明これが爲に起り、而して、世界第一の偉人亦これが
爲に生れたり。千古萬古遙かに下界の治亂興亡を瞰下し
て、今なほ世界の祕密國たる西藏を背後に包擁す。其の豪
壯雄大見ぬ人の殆ど夢想する能はざる所なり。

明治三十三年一月廿四日午後三時、汽車にてカルカッタ市
を發し、印度の北端、西藏の關門たるダージリンに向ふ。七
時三十分、ダムクデヤ驛に達す。恆河河畔の停車場なり。
恆河の河幅、此の邊は廣き處三哩、狹き處も尙二哩半に及ぶ、
五百噸の汽船あり。一日五回、汽車の發着毎に、往復す。さ
て、汽船は徐々に進行を始むるに、乗客は甲板の上に於て晚

餐を喫しつゝ、河上の風景を貪り看る。晩暉已に收り盡して、星光水に落ち、樹木なく、岩石なく、たゞ灰の如き微塵砂より成れる兩岸は模糊として一線を描く。をりから、生暖き風は水面を拂うて遠く又近く亡國の恨を知らずがほなる土人の蠻歌を送り來り、漫に行客をして悲愴の情懷に*



堪へさらしむ。

居ること三十分、船

を捨て、寢臺車に投じ、翌朝七時、シリグリー驛に達す。ここに再び汽車を乗換ふ。これより以北をダージリンヒ

マラヤ鐵道と稱す。軌道の幅僅かに二呎、世界無比の小汽車にて、さながら玩具の如し。交通事業の經驗に富める英國政府が幾多の歲月と莫大の工資とを費して、辛苦經營せる結果の、かくの如くなるを見れば地の嶮峻なること、推して知るべし。是よりダージリンまで僅かに五十一哩。一時間十哩の速力、毎時平均一千尺つつの高度を以て、連山重疊の間を上り行く。忽ち見る、ヒマラヤの支脈、雪を戴いて天空を衝き、蜿蜒として南に走るを。快甚だし。走ること七哩、スーグナ驛に達す。平原竝に盡き、山勢突兀として天を支ふる壁のごとく平原と直角をなして前方を塞ぐ。ベンガル灣頭より此の驛に至るまで三百哩、僅かに

海拔三百呎を上りしに過ぎず。ダージリンまで剩す所は唯三十五哩にして、其の間に七千呎以上の高度を攀ぢざるべからざるなり。汽車は急に速力を緩めて、あくまで臆病に、あくまで謹慎に、平原に直立せる一峯に向つて、蛇の如く徐々として這上る。こゝより以後は、或は峯腰を縫ひ、或は巒巔を匍ひ、忽ちにして千古の森林、忽ちにして萬丈の絶壁、右に曲り左に折れ、前に在るべき機關車、常にこれを側面に見る。此の間の線路、時にはZをなし、時にはOを形づくり、或はUとなり、或はSとなり、又、或はWとなる。此處に至りては、如何なる旅客も心臓の覺えず鼓動し、雙脚の自ら戰慄するを禁ずる能はざるべし。

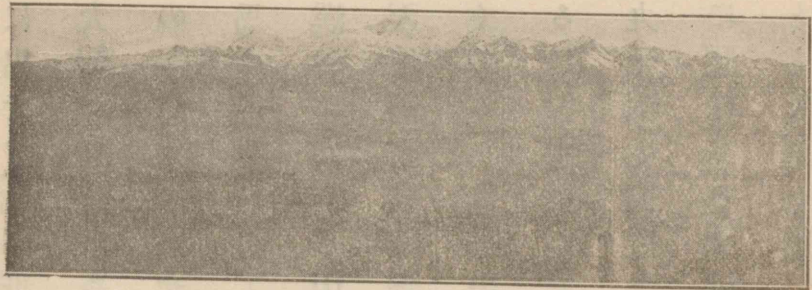
九時十五分、チンダリヤ停車場に着き、止ること二十二分茶菓を喫す。煩蒸の空氣は頓に一變して清涼となり、外套を被りてなほ寒を訴ふ。植物も、熱帶のもの漸く盡きて、温帶のものとなる。十一時、カーセオンに着す。此の驛、海面より五千呎、ヒマラヤ鐵道の中にて眺望の絶佳なる地なり。仰げば、白皚々なる高峰、群島の如く前面の雲海に列なり浮び、顧れば、ベンガルの大平原浩々として際涯なく恆河の流脈日光に映じて、さながら細き銀線を敷きたらんが如く、遠く眼界の外に向つて去る。身は恰も輕氣球に乗りて、亞細亞大陸の中央に高翔せる想あり。午後三時、遂にダージリンに着す。

ダージリンはヒマラヤ山脈中第二の高峯キンチンジャンガより直徑四十五哩の距離にある一山脈の半腹に位す。その地、西藏・ブータン・英領印度・ネパール等に接し、實に西藏といふ世界の祕密藏を開くべき南方の門戸たり。人口一萬餘、今英國の保護に歸す。この地、印度總督を始め、印度にある歐洲人の唯一の避暑地なるを以て、人口年々に増加し行くといふ。

二十六日午前二時半、馬の用意既に成れりと聞き、倉皇食を終へて庭前に出づ。ダージリンより東南六哩にタイガーヒルと稱する地あり。最高峯エベレストは、此の地に至りて始めてその壯容を見るを得べし。旭日遙かに印度洋上

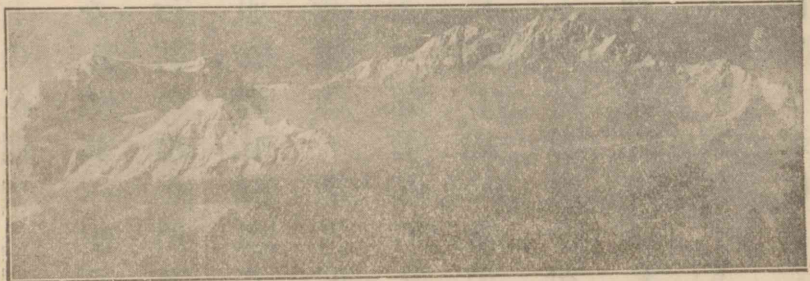
に出でて、此の世界至高の大山脈を照すは、實に天下無比の大觀なり。今や數時の後、此の景に接せんとす。恰も絶世の大偉人に謁せんとするが如き感あり。

馬は徐々として、其の深さ、其の廣さ、共に測るべからざる大溪谷に向へる山腹の石逕を辿る。下弦の月密雲に隠れて、天地靜寂、只蹄聲の憂々として太古の森林に反響するを聞くのみ。我等の騎れる馬は西藏駒と稱するもの、體の小なるに似ず、至つて強健にして崎嶇たる山道に慣れ、よく一萬九千呎の高處まで雪を踏み登りゆくといふ。平生騎行に馴れざる我は、馬の岩石に蹶く毎に、馬背より投出されんとして、屢、心膽を寒うせり。五時、タイガーヒルに達す。憾



ヒ マ マ ラ ヤ

むべし、陰雲四合して、微雪霏々たり。眼前に横たはれるキンチンジャンガの大連峰すら雲の紗を隔て、僅かに其の彷彿を認め得るのみ。一行馬を下り、樹枝を焚いて暖を取り、待つこと一時。天已に明けて、雪愈甚だし。望を失うて歸途につき、更に明朝再訪せんことを期す。二十七日午前二時、徒歩雪を踏んで發す。昨日の騎行の危きに懲りしなり。四時半、タイガーヒルに達す。此の地近きは二三十哩、遠きは百哩、四方唯大山脈の限



の 連 峯

なく連なれるを見るのみ。東南の一角のみや、低くして、うちひらけたり。此の一大パノラマの中に收めらるゝ連峰、その高さ一萬呎以上のもの二十五、二萬呎以上のもの十にして、エベレストは西方にあり、キンチンジャンガは北方にあり。千山萬岳此の兩大峯の中間及び前後を點綴す。天將に曙ならんとす。白雲徐々に山脚に收り、連山悉く天を摩する一大黒塊たり。忽ち見る、當面のキンチンジャンガ、

其の絶巔紫色に變じ、一道の紫光吾人の眼を眩せんとするを。これベンガル大平原の地平線に出でたる旭光の、まづ其の頂を照せるなり。

此の時、山は、其の上部は紫色に、中間は黒塊、下部は白雲の大
海なり。暫くにして、上部の紫は淡紅に、腰部の黒塊は紫に
なり、又暫くにして淡紅は琥珀、又黄金色になり、紫色は淡紅
に變じ、遂に全山紅色を帯びたる銀世界となれり。一秒、又
一秒、一分又一秒、日愈、出でて、變化愈甚だしく、距離の遠近に
従ひ、峯より峯に、山脈より山脈に、其の變化傳はり行きて、赤
きもの、紫なるもの、金の如きもの、銀の如きもの、一時に眼界
に映じ來れり。連峰悉く旭光に浴せる時、なほ背後に一大

黒峯の屹然として立てるを見る。實に、これ百七哩の距離
に立てるエベレスト峰の、猶太陽を迎へざるなり。待つこ
と數分時、忽ち紫金の光輝數條、エベレスト峰の頂より爛と
して群山を照すを見る。此の時、連峰悉く紅色となりて、獨
りエベレスト峰のみ紫なり。

あゝ莊嚴、あゝ雄麗。此の時、此の際、人はたゞ恍然として一
種異様の感に打たれ、其の景、其の情、共に言慮の外にあり、到
底筆舌の形容を許さざるなり。恐らくは、千古の大詩人が
畢生の心血を注ぐとも、此の宇宙無比の大觀に對しては、其
の萬分の一をも描き出すこと難からん。(世界探檢に據る)

*名は春樹。詩人。小説家。

一七 椰子の實

島崎藤村

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。
故郷の岸を離れて、
汝はそも波に幾月、
もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ陰をやなせる。
われもまた渚を枕、
孤身の浮寝の旅ぞ。
實をとりて胸にあつれば、
新たなり、流離の憂。

海の日の沈むを見れば、

たぎり落つ、異郷の涙。

思ひやる八重の汐路を、

いつれの口にか國に歸らん。藤村詩集

一八 遠望

吉江孤雁

*佛文學者。早稻田大學教授。

國境を繞る山脈が、朝のうちは薄い紺青の色を浮べて遠く
見えて居るが、正午近くなると、日の光が四方に瀰漫し、冷た
い空を滑つて山の彼方までも落ちる。空色が淡青になつ
て、冬ながら幾分伸びやかな氣分になる。と、山は低く地面
にひらみつくのか、廣い空の背景のなかへ溶込んでしまふ

のか、暫くの間、只白ぼい青みがかつた冬の光が、空と大地とに漲つてゐるばかり、山の存在が氣付かれない。冬季に於て晝間の静けさを味はれるのは、此の様な日だ。郊外に多い杉林の頂が、眞黒くこんもりしてゐて少しも動かない。黒い此の森の影は如何にも遠く立ちつゝいてゐる廣漠たる樹海を思はせる。小さな三角形の突起を並べた森の頂、何となく物々しい恐しい感じを抱かせられる。今にも動いて、あの静寂が爆發したら、如何なる騒亂が起ることかと不安に思はれるが、終日、頂の平な黒い廣い面は平調を亂さない。

榎樹、槐、銀杏樹は皆落葉し盡し、細いく、枝の先の先まで、形骸を露して、冬の日を全身に浴びてゐる。幹より枝、枝より小枝と、次第に岐れて行く線の先へ先へと視線を辿らせる。と、微細に入り亂れてゐる網細工の、果なく蒼空に向つて、無限の發展を期するもの、如く伸びてゐるのが、如何にも好ましい感じを與へる。直截と微細の感じ、梢の尖端は神経の慄へてゐるやうに何物かを感じ、何物かの襲來を受けて細かに顫動してゐる。忘れたやうに風は起つて來ない。杉の森でも落葉の林でも、此の晝間の静けさを破るまいとしてゐる。その林の中に飛んで居る雀までが、なるべく小聲で鳴くやうにして、羽をすぼめて、ひよいくと、枝から枝へ飛んでゐるばかりだ。

百舌鳥か鶉が、折々思ひ出したやうに、高い銀杏の樹から逆落しに森の深い中へ舞ひ下りるが、秋に聞くやうな華かな全林に響き渡る雄々しい鳴き聲は決して立てない。林の中へ下りても、樹の根元や下草の枯れた中を、何處を當てといふ事もなく、尾をひいてのそく／＼歩いてゐる。

冬の林の中で見る鶯くらゐ、友懐かしげにしてゐるものはない。

武藏野の森に来る鶯は、秩父の山から野を横切つて來るものと、相模の大山から飛んで來るものとの二種あるのだが、春先彼等の小さな眼に濕ひを帶んで、羽色がつややかに、滑かな聲で歌ひ出すのを耳にすると、明かに兩者の區別が立

てられる。けれども冬の森に来る彼等は、はじめのつけやうが無い。たゞ囀を置いて捕ると、必ず其の産地の同じものが籠のまはりに集つて來る。

日が西に廻つて、沈みかゝると、野の果に廣く遠くつゞいてゐる森の中へ没してゐたかと思はれる山影が、あり／＼浮かび上つて來る。黛色といふのは、此の山の色をあらはすに最も適した語だ。富士が黒く紫がかつて見えるといふのも此の頃のことだ。野の果にはつきり浮び上つて、眼路に限をつける。かゝる山脈が在つたらうかと、始めて氣のつくやうに、果しなき眺の武藏野は、眼界が付いて親みを増す。

夕闇の襲つて来るまでの一時、冷たい薄寒い風、皮膚の目にくゞり込んで行くやうなその風を正面に受けながら、じつと見やると、山の麓まで幾里の間かの丘陵・草原・森の姿がはつきり目にうつゝて来る。夕暮の物音は此の山脈に限られて、反響を立て、野に鳴り渡るやうに、一際騒然と聞えて来る。

自分等のやうに、都會の背面を繞る丘陵の上に住んでゐる者には、此の冬の夕方の日の落ちかゝる一時くらゐ、明かに物象を見極め、様々な物の音を一時に耳にする事の出来るのは他にない。紫紺の山影が、劃然と空と野の果を限り、總ての物の音を覆ひ包むやうにして、背後から迫る。その頃、

雜然たる市のどよみは、嵐のやうに郊外の丘陵を、下より襲ひかゝつて、遠く野の中へ向つて行くと、野からはまた野の聲が相呼應して、混交し、紛亂した物の音は、暫し郊外の丘の周圍、次第に薄暗くなつて来る林の中に、どよめきたゆたつてゐる。

血紅色の太陽は沈み果てた後までも眞紅の雲を長く残して、容易に其の光を消し去らない。晝間は少しの雲も見えなかつた空に、黒い雲が幾重も出て来るが、それでも此の血を流す紅の雲を押し潰す力は無い。山の頂の流の個處は盡く黒雲に包まれても、此の紅色雲の下だけは眞夜中近くまで、紅な色に照されて、遠くからはつきり見えてゐる。此

の血紅色の太陽と、その餘光を止めたこの血紅の雲とは、冬
それも初冬でなければ見られない特色である。

(若き自然)

一九 霧の倫敦

夏目漱石

*名は金之助。文者。大正五年没す。

昨夜は夜一夜、枕もとで、ばち／＼云ふ響を聞いた。これは近處にある大停車場のためである。この停車場には、一日のうちに、汽車が千幾つか集つて来る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位つつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ来ると、何かの仕掛で、爆竹の様な音を立て、相圖をする。信號の燈光は、青で

も赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて、そこを見下すと、そとは一面にぼうとしてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の堀に圍はれて、一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれがしんとして凍つてゐる。隣の庭も其の通りである。此の庭には綺麗な廣場があつて、春光の暖い時分になると、白い髯をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て来る。このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡をとまらせてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれさうな位に近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴き

たてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、斷間なく、芝刈器械を廣場の上に轉がしてゐる。この庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿の庭と何の境もなくのへつに續いてゐる。

裏通りを隔て、向側に高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃に疊み上げた胴中さへ、ありががまるで分らない。それかと思ふ處が、心持黒いやうでもあるが、鐘音はまるで響かない。

表へ出ると二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと

また二間ばかり先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程、新らしい二間四方が現れる。その代り今通つて來た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切抜かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それなのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から、霧を冒して飛乗つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だなと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裏に包まれて行く。ウエストミンスター橋を通る

時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてゐると、封じ込められた大氣の裏に鷗が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと空の中でたゞ音だけがする。用事をすまして河沿の道を歩いて來ると、今まで鼠色に見えた世界が突然四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身のまはりに流した様に、黒い色に染まつた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は穴藏の底を踏むと同然である。自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇んだ。

自分の傍を人が大勢通る様な心持がするけれども、肩が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのかどうだか疑はしい。其の時、この濛々たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黄色に見えた。自分はそれを目標に、四歩ばかり歩いた。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では、瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如くにして居る。自分はやつと安心した。こゝを通り過ぎて、手探りをしないばかりに、向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には同じ様な横町が幾筋も並行してゐて、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な氣がした。それから二町程、眞直に歩いた様な心

持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前迄來て止つた。それから段々遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた後はしんとしてゐる。自分は又、暗い中にたつて一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(漱石全集)

二〇 蓮月尼

鹽井雨江

名を聞きてだに、ゆかしく清げなるを、まのあたり見し人に尋ね、或はものゝ本に記せるを見るに、其の人、容色の美しきは、蓮の花の露に濡れたるが、あしたの風に匂ひこぼるゝ如

*名は正男。
國文學者。
奈良女子高等師範學校教授。大正二年歿す。

く、徳操のめでたくすぐれたるは、望月のくまなき光のすみわたりたるがごとくなりけり。蓮月、名を誠子といひ、父を太田垣光古といひけり。家は代々因幡の鳥取さいふ處にありけるが、父の代になりて京に出でて、東山あたりに住みけり。京の東山、名にしるき櫻の土地、花はづかしき誠子は、此の名山の花の間に生れたり。

思へば、名山、何のえにしありけん、名花いかなるゆかりありけん。誠子の美しさは容色のみならず、心もまたあはれに美しかりけり。文もめでたく、歌にも堪能なりき。才藻のみにあらず、徳行も亦世の常の女子に勝りて、父を敬ひ、母にやさしうかしづきつゝ、親の訓の庭にたちならはしけり。

母亡くなりてより、父も秋風に孤雁の聲かなしく、唯誠子を朝夕の力草としたりき。誠子も亦父のみの一柱をわが家が身の頼み所としけるが、媒する人ありて、彦根の近藤某

古戦場の紅葉蓮
月た、かひし
大月のち、ほは
秋ふかき紅葉に
のころみよしの
のやま

古戦場の紅葉蓮
月た、かひし
大月のち、ほは
秋ふかき紅葉に
のころみよしの
のやま

蓮月尼筆蹟

といふを夫に迎へけり。妻の道子の道にそむかじと思ふが朝夕の願にして、神に祈り佛に願ふも、書に問ひ歌にいふも、唯、これのみなりけり。誠子四人まで子を儲けゝるが、この世の幸や薄かりけん、園の撫子秋を待たずみな枯盡し、はては何處何時までも離れじと思ふ軒のつまさへ、無常の風

に誘はれて影をとゞめず、あさちふが宿、また父とわれと唯二人とはなりにけり。かくて誠子が緑の髪と共に浮世の交を断ちて尼となり、蓮月と呼びけるは三十あまり三つばかりの時なりけり。誠子が四十歳ばかりなりける頃、父も亦歸らぬ旅路に出で立ちぬ。

常ならぬ世はうきものとみつぐりの

一人のこりてものをこそおもへ。

たらちねの親のこひしきあまりには、

墓にねをのみなきくらしつゝ、

いかに嘆けどもさらぬ別のせん方なくて、岡崎といふ里に

うつりて、風月を友として、世になき父母、わが夫、わが子をしてのびて暮したりけり。

岡崎の里のねざめに聞ゆなり、

北白川のやまほととぎす。

冬畑の大根のくきに霜さえて、

あさとて寒し岡崎のさと。

父のありけるころより、家には貯とては無く、心は世外にあれど、さすがに此の世に在れば、たづきなくては叶はねば、自ら埴もてつくねておのが詠める歌を彫りたる茶瓶など造り出でて朝夕の料としたりけるに、世にいたく珍重せられたりき。

蓮月の名は、歌に、陶にかくれなくなりければ、世を捨果てんと思ふ身の、なかくに世に交しげくなるをいたく思ひわびて、彼處に移り、此處に住み、果ては北山の奥ふかき西賀茂のなにがし寺の茶室に引籠り居てまた出でざりき。この頃の閑居の作ならん。

露の身をたゞかりそめにおかんとて、

草ひきむすぶ山のしたかけ。

北まどの風にやれたるふるすだれ、

めもあはぬまで寒きよは哉。

うなる子が垣根に近くつめばこそ、

草のめでたき春も知らるれ。

いたく行ひすまして、明治八年十二月三日、八十ちあまり五つにて、

願はくは後の蓮の花のうへに、
と遺して空しうなりにき。

誠の心一つに孝悌の道をふみて、遂に誠子の名に恥ぢず、徳も才も姿も清くうるはしくて、蓮月の名にそむかぬ世を通しけるこそあはれなりしか。(雨江全集)

二 吾妻路

阿 佛 尼

廿七日。明けはなれて後、富士川をわたる。朝川いと寒し。

藤原爲家の室。
鎌倉時代の人。
後宇多天皇建治元年十月。

駿河國庵原郡蒲原。

伊豆國三島町。

數ふれば、十五瀬をぞ渡りぬる。
さえわびぬ、雪よりおろす富士川の
今日は日いとうらゝかにて、田子の浦に打出づる海士ども
の漁するを見ても、
心からおりたつ田子のあまじろも、
ほさぬうらみと人にかたるな。
とぞ言はまほしき。伊豆の國府といふ處にとまる。
廿八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜
深かりければ、
たまくしげ箱根の山をいそげども、

なほ明けがたき横雲のそら。

足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。

いとさかしき山をくだる。人の足もとゝまりがたし。湯

坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、又麓に早川と

いふ川あり。まことにはやし。木の多く流るゝを、いかに

と問へば、海士の藻鹽木を浦へ出さんとして流すなりといふ。

あづまちの湯坂を越えて見渡せば、

しほ木ながるゝ早川のみづ。

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、とまるべきところと

ほし。伊豆の大島まで見わたさるゝ海面を、いつことかい

ふと問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

今の酒匂川。

あまの住む、その里の名もしらなみの

よするなぎさに宿やからまし。

丸子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂と

いふ處にとまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり

(十六夜日記)

三 浮島原

義経の経の事記

佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度はことの外

嬉しげにて、さらば、これへおはしまし候へ。見参せん。と宣

へば、彌太郎やがて参り、御曹司にこの由を申す。御曹司大

きによるこび、急ぎ参り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽

左兵衛權佐源頼朝。

源義経。

左馬頭源義朝

平清盛の繼母

伊豆蛭が島

伊東祐親

北條時政

じて、まつ涙にむせび給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。互に心のゆくほど泣きて、後、佐殿涙をおさへて、さても頭の殿におくれ奉りて、その後、御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尻の宥められしによりて、伊豆の配處にて伊東・北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由は幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企て、候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大

八幡太郎源義家
新羅三郎源義光

事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり。頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人をのぼせんとすれば、平家と一つになりて、却て東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が祖先八幡殿の後三年の合戦に、舍弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にいかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの御返

京都の東南に在る。
京都の北にある。
藤原秀衡。

事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て、大名・小名、互の御心おしはかりて、皆袖をぞぬらしける。しばらくありて、御曹司申されけるは、仰のごとく、幼少の時、御目にかゝりて候ひけるやらん。配處へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて秀衡を頼み候ひつるが、御旗場の由承りて、取りあへず馳参る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候こゝちしてこそ候へ。身をば、君に進らする上は、いかゞ仰に従ひ参らせては候へき。と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。

さてこそ、この御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。

史學者。
文學博士。

陰中國平泉驛の北六町。一名衣川館といひ、文治年中源義經がこゝに戦死した。

二三 高館

一

笹川臨風

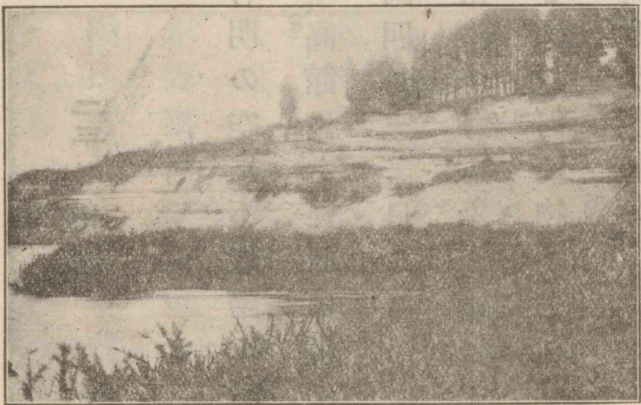
有明の空に不如歸が啼く。短夜の明け離れんとする黎明頃、高館のあたりは俄に物騒がしくなつた。時は文治五年閏四月三十日。常陸坊海尊ふと目を覺まし、中門の傍に走り出て見渡せば、こは如何に物々しき軍兵が十重二十重と高館を取圍む。海尊大聲揚げ、

「是はいづくの軍兵で、何用あつて斯くは騒がしいぞ。」

と云ふ。侍大將と思しきもの、馬を大門の下に寄せ、

義經。

朝頼。



までは夢更に知らざりしは一生の不覺と、海尊取敢へず辨

判官殿御謀叛の噂隠れもな
い。出羽陸奥押領使藤原朝臣
泰衡、勅命により、よつた鎌倉殿
高の仰を蒙り、此まで推參致した。
斯く申す某は泰衡の御内人江
館刺小次郎信重でござる。判官
殿には尋常に御自害あつて然
るべう存じまする。
すは一大事の起りけるよ、昨日

慶以下の御内人を起し、月見御所に馳せて、此の由を判官に
申す。高館の騒は一方でない。

鏑矢一つ遠鳴りして屋の棟にすつくと立つ。伊勢三郎・龜
井六郎・鷺尾三郎・片岡八郎、以下の面々各、身支度する。辨慶
は兼房と打連れ立つて月見御所に駆けつける。判官起ち
上つて鎧を着ける。北の方には先年儲けられたる姫君を
抱いて唯涙に咽ぶばかりである。

義經。

泰衡の父、義經
を保護した人。

殿、斯う有らうとは武藏ちつとも存じませなんだ。一生
の大不覺、何とも御詫の致しやうもござりませぬ。秀衡殿
卒去後一年許りは懸念な致しましたが、もうよかるべう存
じましたるは取返しのつかぬ誤。武藏も年老いたるかと

(二) 陸中國磐井郡にある。泰衡の居地。
(三) 羽前國西田川郡にあつて越後國境に近い。

遺恨にござりまする。」
流石の辨慶齒をくひしばつて、大粒なる涙をぽつり／＼と落す。判官ちつとも騒がず、
「天意であるぞ。人間業の致す所ではない。そちたちの不覺では無うて、義經の命數ぢや。今日は義經の運も窮りたるぞ。義經生年三十一歳、潔よう此處で自害を致さう。頼みに致した陸奥平泉が斯うなつては義經もう落ち行く處は無。故秀衡ぬしの卒去が身の不幸、又泉三郎は一昨日念珠(三)の關へ發足したとやら、是亦身の不幸。いや、是は泰衡が遠ざけたる謀であらう。長らくそちたちに憂身を見せたが義經の運の開けぬ爲、そちたち迄が我と同じく花咲

かて萎み往くこと、まことに憐なことにてある。宥してくりやれ。」

二

伊勢三郎・片岡八郎たち六七人は今日を最期の合戦と心に決め、遣戸・格子を楯に散々に射る。鶯尾三郎・龜井六郎・駿河次郎は大門さつと開かせ、業物打振り、馬に跨り、雲霞と群る敵の中にをめて入る。
鶯尾三郎、心に思ふやう。につくきは押領使泰衡、近づいて刺殺してくれんと、小敵には目をもくれず、亂軍の中を東西に馳せ違へ、飛び交ふ矢をば切り拂ひ、寄り來る敵をば馬蹄*にかけ、まだほの暗きを幸に、敵軍にまぎれて闖入すれば中

* 平泉にある寺。

尊寺の小高き丘の上に十騎ばかりを従へて遙かに合戦の模様を伺ふ萌黄緘に鹿角の冑を戴き、葦毛の馬に黄覆輪の鞍置いたる大將がある。すかして見れば擬ふ方なき泰衡其の人である。遠矢にて射て落さんものをも思つたが、征矢一つだにない。味方と見せて近づき、怨の刃を彼が身に加へて修羅の妄執を霽してくれようと、馬をそちらに駈寄せせる。

驚尾は中尊寺の岡に飛鳥の如く馬を駈上げて、泰衡の前に程近くなれりと見る間に、躍り出でたる伊澤四郎、馬の手綱を引きしぼつて、

「誰ぢや。」

と云ふ。驚尾三郎咄嗟の際に早速の機轉、

「長崎大夫介。」

と呼ばはる。長崎大夫介は今日の討手の大將。伊澤、馬を

二足三足進ませて、

「何、長崎殿とや、何用あつて

これへ。」

驚尾の答も待たず、すかし見て、

「曲者、長崎殿ではおざらぬ。」

ちえつ見顯されたかと、驚尾抜く手も見せず、伊澤をばらりずんと切つて棄てれば、血煙立つて馬より落ちる。すはや



敵ござんなれと、騎馬武者は馬の首を立直して、泰衡を中に圓陣を作る。稗拔七郎、三尺の太刀引抜きて切つてかゝるを鷺尾引つ外し、雙の足に力をこめて馬の太腹を蹴れば、馬は躍り上つて圓陣の眞中に驀然に駈け入る。さはさせじと、由利八郎・赤田次郎推し隔てるを左右に突きのけ、泰衡目がけて一太刀浴せる。冑を斜にかけて肩に發矢うちとあたれど、冑は南部鐵を鍛へたる稀代の鉢金、切り削られたが傷はつかぬ。肩には血汐がさつと迸りたれど、それとて二三寸の薄手に過ぎぬ。今一太刀と振り上ぐる間もあらせず、左右に閃く太刀と太刀、狂ひに狂ふ鷺尾の肩や腕に切りつける。えつ面倒なりと、鷺尾が拂ふ太刀風鋭く稗拔七郎頤よ

＊盛阿地方を南部さふい。

り胸に一太刀受けて、馬より眞逆様に頭顛倒と轉び落ちる。由利八郎太刀かなぐり棄て、無手むてと組む。鷺尾いらつて振りほどかんとするを、赤田次郎横腹ぐさと刺せば、無念とばかり、さしも勇士の鷺尾も其の儘馬上にて最期を遂げる。高館の方には合戦今ぞ闌なると覺しく、伊勢三郎は大童になつて、敵陣の中に割つて入る。龜井六郎は寄來る敵を當るに任せて切つて棄て、十餘人を切倒し、二十餘人に重手、薄手を負はせて、遂に亂軍の間に花々しく討死する。常陸坊海尊は大鐵杖をりうく、打振り、人馬俱に微塵に碎き、阿修羅王のやうに暴れ廻つたが、矢に射すくめられて、首級しきを上げられる。駿河次郎以下の面々、いづれも祕術を盡し、此處

を先途と戦ひたれど、衆寡敵せず、あちらこちらに最期を遂げる。判官の御内人も今は残少になつた。夜はやうやうに明け離れたが、馬蹄に蹴散らす塵は濛々として、空も薄暗いばかりであつた。

三

九郎判官源義経は小櫻緘の鎧に黄金の龍頭をつけたる冑を着け、弓杖ついて月見御所の縁に出で征矢三つ四つ敵に向ひて射かけ、騎馬武者二三騎射て落す。此の時髪を大童に取亂し、血汐にまぶれて駆け來るものがある。近づけば是なん片岡八郎。判官の前に跪き、

「合戦も今が最後と見えます。今生にて今一度君に拜

顔致したうて棄つべき命を存へて推參致しました。伊勢三郎・鷲尾三郎、兩人の行方は能うも知れませねども、是も討死致した事かと察します。其の他の御内人は皆々勇ましい最期を遂げました。武藏坊は大長刀を車輪の如くに廻して敵軍中に躍り入り、名乗りを上げて散々に切り靡け、衣川のほとりにて長刀杖に立ちはだかり「叡山西塔に育ちたる武藏坊辨慶が舞を見よ、蝦夷の奴原が孫子の語草にせよ。」といひ終つて一舞舞つて、かゝれやかゝれ、蝦夷どもの冑を首諸ともに衣川に流してくれうと、切靡けました。其の働のすさまじさ、見る目も面白うおざつたれど、射かけた矢は蝟の如く其の儘衣川に立ながらの最期、天晴なる討死で

おざりました。某は亂軍の中を切靡けて此處まで参りましたが、よき敵と引組み、刺し違へて死なん所存、一足お先に三途の川にてお待ち仕りませうぞ。武藏坊以下の面々、さぞや待ち居ることにておざりませう。三途の川は山伏姿で無うても威張つて通られまするかと存じまする。さらば我が君、おさらばでおざりまする。」

と語るも息苦しげに見える。判官黙禮し。

「火が揚らば、義經の最期と思へよ。」

片岡八郎の跡見送て黯然たることしばし。

「兼房居やるか。」

「あつ。」

と畏つたるは、白髪頭の増尾十郎權頭兼房。

「義經まつた北の方の介錯はそちに頼うだぞ。」

北の方と姫君とを具して判官は持佛堂に入り、心靜かに冑と甲とを脱ぐ。

年來肌に離さぬ守刀は、するりと鞘を脱した。紫の電はさつと迸る。

「兼房、北の方の介錯致せ。」

わつと兒の魂ぎる聲が聞える。

一團の黒煙は持佛堂から渦を卷いて噴き出る、つゞいて紅の火炎が迸る、火の粉は流星の如く降り注ぐ。梁の落ちる音、柱の倒れる響、火は持佛堂から月見御所に吹きつける、一

面に紅蓮の海、焰の浪。

其の焰の裡に屹然突立ちたる判官の顔は、火に輝いて、又なく勇ましく、凜々しく、神々しく、悲壯なものであつた。

四

持佛堂から月見御所、高館一廓を燃し盡して、さしも凄じかつた劫火も消えたが、判官の亡骸はそれと求むるに由なかつた。あらぬものゝ、首級を判官と作りなし、美酒に浸して泰衡之を鎌倉に送つた。和田太郎義盛、梶原平三景時は首實檢として腰越に立越えたが、四十餘日を経たる今日、殊に日頃の暑氣で、固より判官か否かを確かむるに由なかつた。泉三郎忠衡は念珠の關より夜を日について平泉に着いた

が、あゝ既に遅かつた。ありし高館の榮華を偲ぶひまもなく、泰衡に取圍まれ、無慚の最期を遂げた。(舌跡めぐり)

二四 本多重次

新井白石

徳川氏の世臣。文祿五年歿す。
名は君美、將軍家宣に仕ふ。享保十年歿す。
徳川家康。

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出来て、既に危く見えさせ給ひしかば内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、唯、弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せ置かる。人の周章いふに及ばず、士民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、殿も定めて覺えさせ給ひな

ん。重次が昔此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上、醫療其の詮なし。且は命を惜しむに似たり」とて、用ひ給はず。重次大に怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに、又、良醫して治し參らせんとするをも用ひ給はず、失せ給はん事、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、彼等争でか治し參らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば、御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大に驚かせ給ひ、あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で、引留め、仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らかして、最期の暇乞うて罷り申す者を、見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて、出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、げにさも候。」とて、御前にまゐる。

徳川殿「汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縦ひ家康が命を終るとも、汝が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又、汝等も如何にもして一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思

はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、其の詮なし。重次若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れも敬はれもつかまつれ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御掣あそびの北條殿、我が國々を取らんとし給はん、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れし、はかくしき矢の一筋をも射出

*家康の女督子北條氏直に嫁す。

*武田勝頼。

すこと叶ふべからず。當家滅されん事、亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつたるかたはものは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世に恥をさらすらん。」と後指さされん事老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今は、此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにて候はず、我が身の果もあさましきによつて御先に死することにて候。」と申す。

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば、醫療の事は汝が心

に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべしとも一日も生残つて、後の事よきに計らふべしと存するや否や」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次、いかで又仰をや背くべき」と申す。「さらば、醫師召させよ」とて召さる。醫師やがて参つて、御灸治宜しかるべし」と申せば、重次、艾取つてすう。御灸の痛覺えさせたまはねば、艾を増加ふること多くして、後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけて参らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れ、膿水、血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉し泣に聲を限に泣く。御前伺候の人も感涙

を共に流しけり。(藩翰譜)

二五 税所敦子君を誄す

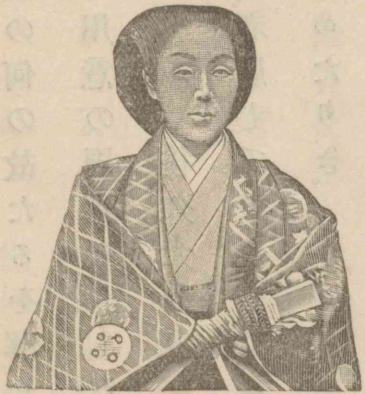
高崎 正風

明治二十三年二月四日歿す、年七十。
宮内省御歌所長男爵。明治四十五年歿す、年七十七。

嗚呼、税所刀自逝きぬ。わが無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は鹿兒島士民の普く知る所、その後半生の名譽は輦轂の下に隠れなし。然れども、前後に通じてよく之を知悉せるは蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歳十九の頃なりき。相見しは歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。君は正風と藩を同じくして京都に勤務せる税所篤之氏の

繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも、夫に訣れたり。嗚呼、君は京都に生れ、京都に成長し、京都に結婚せる優美艷麗なる婦人なりき。當時、鹿兒島の風習たるや、同郷人の外は他所者としてこれを賤しみ、その姑の如きも京女の新に來りて同居することを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて、遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸りて、その姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとしても猶難色あらん、否離婚をも乞ふなるべし。君が己れに克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、之を以ても知らる。況や、京都より齎し、衣服調度の美なるものは、擧げてこれを前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、

*島津齊彬。



子 教 所 税

身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、かつて君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月をかさねずして、たちまち君を杖柱ともたのむに至れり。
 國君順聖院公之を聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して大いに喜びて曰く、吾人を得たり」と。世子夭す。君悲歎に堪へず、自刃して殉ぜんとす。姑取縋りて泣きて曰く、われ今御身を失はば、何を樂しみてかこの世に生殘るべき」と。君これが爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて君が傍を離れず。又、正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母もしくは姉にあてゝ送らる。當時、正風迂疎にしてその何の故たるを解せざりき。後に思へば嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞、誰かこれに加へん。後、久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して、老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

*齊彬の弟、明治の初左大臣であつた。

明治八年に至りて、坤宮女流の人材を徴し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉

ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫を始め、同僚宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに違あらず。君もと蒲柳の質しかも、公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年、大いに病む所ありき。天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとしたまひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて、宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

嗚呼、君が八百年以來、唯一人の女文豪たりしことは、世人皆これを知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食より

*佛法僧。

善行を表彰る會。男爵はその會長であつた。明治三十三年。

正風の長男、海軍少佐。明治三十七年旅順に戦死した。

も甚だしく、わが彰善會の起るや、尤も熱心なる賛成者として金員を寄附せらるゝこと數なりき。君、去んぬる一月五日、正風が病床を訪ひて、告げて曰く、明年七十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。いさゝか自ら壽すべし。と。正風大いに之を賛し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今はつひに全く畫餅となりぬ。

正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて葬場に會するをだに得ざるは、何らの慘ぞ、何らの痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病をつとめて此の誄を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼、哀しいかな。

二六 綾のみけし

税所敷子

たちちの母のいまげはまもれ

あやのみけしはまもれ

お田垣産月

やどろねらゝのつらさをなまけし

熊月産月

畑村望東

かほの漱にあはまの流氷を

追ふあらそらしてゆく歌鴨かふ

大納言柳原均光の室。慶應二年歿す。

京都の醫高島清素の妻。明治十四年歿す。

福岡藩士野村貞
貫の後妻。慶應
三年歿す。

高畑式部
あそふ事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、傍なる足鼎を取

りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻おし平めて、舞

出でたるに、満座興に入るこ

と限なし。

暫し奏でて後、抜かんとする

兼好法師

兼好法師

吉田兼好。後醍
醐天皇の頃の人。
山城國葛野郡花
園村御室に在つ
て、眞言宗御室
派の本山。

これに仁和尚の法師、童の法師にならんとする名残とて、各



りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻おし平めて、舞
出でたるに、満座興に入るこ
と限なし。
暫し奏でて後、抜かんとする
に、大方抜かれず。酒宴事さ
めて、いかゞはせんと惑ひけ
り。とかくすれば、首のまは
きり缺けて、血垂り、たゞ腫れに
腫れて、息もつまりければ、打
割らんとすれど、たやすくわ
れず、響きて堪へがたかりけ

れば、叶はで、すへき様なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら、人の怪しみ見る事限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて、聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなとか生きざらん。たゞ力を立て、引きたまへ。とて、藁のしへをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうけ

ながら、抜けにけり。辛き命まうけて、久しくやみ居たりけり。(徒然草)

二八 安元の火

鴨の長明

鎌倉時代の隠者
高倉天皇の御代
平氏最盛の時代

去ぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出來て乾に至る。はてには、朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや。病人を宿せる屋より出で來りけりとなん。吹迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焰を地に吹きつけた

り。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて、あまねく紅なるなかに、風に堪へず吹切られたる焰飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人、現心あらんや。或は煙にむせびて倒れ伏し、或は焰にまぐれて忽ちに死しぬ。或はまた纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費幾そばくぞ。このたび、公卿の家十六焼けたり。まして、その外は、數を知らず。すべて、都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人。馬牛の類邊際を知らず。人の營皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を造るとして、寶を費し心を惱す事は、勝れてあちきなくぞあるべき。(方丈記)

二九 日蓮上人

高^{*}山林次郎

^{*}號は楞牛。批評家。文學博士。明治三十五年歿す。

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、砂に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。と喝破し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして、豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人

が人情に篤く、恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に咽ばしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に、馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び

相模國鎌倉町の西一里餘。北條時頼が日蓮を龍口に斬らんとしたが、子時宗にだめられ、死一等を減じて佐渡に流した。

十方の諸佛、手を引き袂を執へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墮すべし。との意を述べられたり。その



の恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として、一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年日本

甲斐國南巨麻郡
久遠寺。

六十六箇國、島二つの内に五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隠るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日もかゝさず一日に一度は必ず攀登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中にこれと比較し得べき美談あるか。

武藏國在原郡。
東京の南三里餘。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ／＼いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに、知らぬ舍人を附けて候うては覺束な

く覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲、即ち刺を織る絲なるにあらずや。(樗牛全集)

漢學者。第二高等學校教授。

三〇 信

安藤 圓秀

一

水汲に出た子貢が、井戸端から目を放つた時、稍離れた軒下の竈の傍に蹲つて、克明に燃えさしの木を片付けてゐる顔淵の姿がふと目に留つた。

彼は感謝の心一杯になつて、顔淵の姿を見守つてゐる。

顔淵は薪の始末を終へると、竈に寄添うて釜の蓋を取放つた。抑へられてゐた湯氣は棒のやうに舞上つた。

一二分も経たぬ内、子貢は見てはならぬものを見た様にぎくりとした。それは釜の内から一杓子の御飯を抄ひ出し

孔子の最高門人。

て置いて蓋をした顔淵が、暫く躊躇した後杓子の飯を食へるのが、はつきりと認められたのである。

子貢は全身に冷水を浴びた様に感じた。名狀し難い錯雜した思が旋轉して、急遽井戸端から去つた。

二

「先生。」子貢は興奮した面持で孔子の座へ近寄つた。

「先生うかゝひますが、どんな仁者でも愈窮迫して來ると、素地の野性が出て來るもので御座いませうか。」

「勿論そんな事はない。そんなやうでは仁者ではない。」

「先生。私はたつた今情ないことを見せられました。」

三

*顔淵の名。

「それは何か其許の思ひ違ではないか。私はどうしても、
回まわを疑ふ氣にはなれぬ。回に限つて其の様な卑しいこと
の有らう道理がない。これには何か仔細があらう。まあ
お待ち、私が訊いて見よう。」
躍起になる子貢を押鎮めて、孔子は顔回を呼んだ。

四

「先生何か御用で御座りますか。」

「今日は其許は御飯焚ださうちやな、御苦勞々々々。」

「いゝえ、子貢さんのお持ちの米のお蔭で皆々大喜で御座
います。もう間も無く御食事が整ひます。」

「久し振の御飯ちやからのう、——實はの、私は昨晚死なれ

た母親の夢をありくと見ましたのちや。私達が斯うし
た羽目になつてゐるから、何か蔭ながら助けて居て下さる
ことかとも思つて、今朝は大變お懐かしく思つてゐるのち
や。御飯が出来たら御供養にお初穂を差上げたいと思ふ
から、少しお供へをしてくれぬか。」

「あ、さうでしたか。それはつい不調法なこと致しました。
實は先程餘り急ぎ立て、焚きましたものですから、出来工
合がどうであらうかと思ひまして、釜の蓋を取つて見まし
た時、どうしたはずみか、軒から煤の塊が釜の中へ落込みま
した。早速煤の附いた處だけ杓子で抄ひ取りましたが、汚
れたものを神様へのお初穂にも恐多いし、それかと申して、

縦令一粒でも、子貢さんのお情の籠つたものを棄て、仕舞ふのは勿體無いし、煤を取去つて、鼠色にはなつてゐましたが、私が戴いて仕舞ひました。そんな譯でございますから、もうお初穂に差上げることは出来まいと存じます。」

「おゝさうか。何、それでは此の次に炊いた時で宜しい。皆も嘸かし待つて居ることぢやらう。早く食へられる様世話してやつてくれ。私も一緒に戴きませう。」

「私の不行届から本當に残念な事を致しました。ではお支度を致しませう。」

顔淵は一禮して靜かに出て行つた。孔子は微笑しながら、

「^{子貢の名。}賜や、どうぢや。」

「誠に恐入りました。」

「私は何處迄も回を信じてゐる。私の信賴は決して裏切られる事は無いと思ふ。——のう賜や、私は却て其許の疑ふ心を淺ましく思ふのぢや。だが決して其許ばかりを責めようとは思はぬ。お互に道に因つて結び付けられてゐる私達が、如何ほど飢に苦しもうとも、僅か一杓子の飯を中心にして、互に淺ましい疑を抱かねばならぬことを悲しく思ふのぢや。」

孔子は忍び難い暗然たる思ひに鎖されて堅く口を噤んだ。

「誠に——誠に何とも申譯がありません。」

身の置處も無いやうに恥ぢ入つた子貢は、其の場にひれ伏

して暫くは身動きもし得なかつた。(孔子とその徒に據る)

三一 蘭人の趣味

松本亦太郎

*心理學者。文學博士。東京帝國大學教授。

天然に對して趣味・同情を有し、人世の流轉に對して愛惜の念厚く、過ぎ行く刹那々々の現在を樂しむは、蓋し和蘭人一般の特質である。和蘭の地たる、元來一面の低地で、河流は停滯し、海水は浸潤し、濕氣深く、天與の美は無いのであるが、國民の勤勉にして、且趣味に富み海を堰きとめて港を築き、河水を疏通して船舶の來往に便にし、風車によりて、水を汲干して牧場を設け、泥澤を乾かして森林を作つた。そのため國中到る處に、大樹鬱葱として生ひ茂り、牧草芊々として

て地を被ひ、禽鳥蕃殖して牧牛と群を共にし、田野の風光生生の氣に充ちて、恰も樂園の如くである。而して、又、蘭人は河畔に林間に頗る雅致ある別墅を設け、極めて閑靜なる住居を爲し、歐大陸の競争を外にして、天然の平和を樂しんで居る氣味がある。

和蘭を旅行して見ると、本來無味の天地が、如何にして、彼の様
様に愉快なる風光に變じたかと驚くばかりである。山水の景色を畫がき、且、天然と人間とが調和して居る田園の風光を畫がくに於て、和蘭の畫家は、歐洲の畫界に先鞭を着けた。洋畫に於ては、山水畫、田園畫、風俗畫は、和蘭を以て、源泉とするといつてもいゝからである。北歐に於て、最も天

與の好風景に缺乏せる和蘭から、許多の卓絶せる山水畫家を輩出せしめたのは、如何にも不思議の様であるが、この國に入つてみると、その譯がわかる。蘭人は、自然に對して、深い趣味を有して居るのである。英國の隆盛なるに先だちて、和蘭が政治・宗教・學術・商業・航海等に於て活動し、聲名を世界に揚げたのは、一は、英國人と等しく、自然に對し人間に對し、深い趣味・同情を有して居つたからで、これが國民の大なる奮發心を喚起したのであらう。(渡り鳥日記)

三三 蛙の聲

長 塚 節

春は空からも、土からも、微かに動く。毎日のやうに、西から

*文學者。
大正四年歿す。

埃を卷いて來る風が、どうかするとはたと止つて、空際にはふはくした綿のやうな白い雲が、ぼつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かずに居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ存分に吸つて、其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛の木のちみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の情態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くゝゝと鳴き出すことがある。空から射す日の光は、そろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸つて止まない。土はすべてを段々と刺戟して、堀のほとりには蘆や

芝や其の他の草が空と相映じて、すつきりと其の首を擡げる。軟さに満たされた空気を更に鈍くするやうに榛の木の花はひらくと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の情態から離れて軟な草の上を手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。彼等は更に、春を一切の生物に向つて促す。草や木が心づいて、其の活力を存分に發揮するのを見ない間は、鳴くことを止めまいと力める、田圃の榛の木はとうに花を捨て、自

分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらつて居る周囲の林を見る。岬のやうな形に偃つて居る水田を抱へて、周囲の林は漸く其の本性のまにまに、勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、種に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞かしさうに葉の間から、こつそり四方を覗く。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、

ふけた。」と呼びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空
間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲
を壓し去らうとして、互の身體を飛越え、鳴きたてるの
で、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。
さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げばまばゆき
に堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没し
て、其の小さな喉のちぎれる迄は、劇しく鳴らさうとするの
である。蛙は愈益、鳴き誇つて、櫛の木の様な大きな常磐木
の古葉をも、一時にかりりと落さねば止むまいとする。
此の時すべての樹木や、それから、冬季の間には、ぐつたりと
地に附いて居たすべての雑草が爪立して、只空へくと暖

な光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さ
ない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。
冬季の間は土と平行する事を好んで居た人も、鐵の針が磁
石に吸はれる如く、土に直立して、めいゝに手に農具を執
る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲し
いと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹
させて、身を撼かしながら殊更に鳴きたてる。白い絹絲の
様な雨は、水が田に滿つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くへ
き時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し、働
いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を
動かせくと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時

には、日中の暖さに人もぐつたりと成つて、田圃の短い草に
ごろりと横に成る。

静かな夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く響くかを誇
るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつ
きり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を櫟つて、百姓
のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することに
よつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。

彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を
蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺
醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返す
のである。草木は遠く遙かに響けと鳴く其の聲にゆられ

つゝ、夜の間に生長する。櫟や檜や其の他の雜木は、蛙が鳴
けば鳴くほど、さうしてそれが、鳴きやむ季節まではいくら
でも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲や
其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと
屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふ様に、力強い線
が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。(土)

三三 都につきて 榎* 口 一 葉

今四日午後三時、この地に事なく着き申候。御申含め
の通り停車場より車をやとひ、此處の伯母様が御許ま
で時の間に飛ばせ参り、いさゝかもまごつくやうの事

*
名は夏子。女流
文學者。明治二
十九年歿す。

はなく候ひしまゝ、御安心下されたく候。
土産の品々、伯母様大喜び遊ばされ、何々は何と申して
も國計のこそよけれ、この地にも面影うつしたるがな
きにはあらねど、味格別におとりて、かくはあらじ」と一
人引寄せて大事がられ候。

「この地着の御知らせとくく、參らせよ。」と促し立てた
まひ、一人娘の一人旅をはじめてさせたる親心、そなた
が思ふやうなるものにはあらで、此方の空のみ打ちな
がめ物案じに日を送るべきなれば、一時の延びは一時
の不孝ぞ、と仰せられ候。この巻紙も封筒も伯母様よ
り賜はりたるにて御座候。私はまだ行李も解きあへ

ず、それが麻繩緩めんとして立ちあがり候處、文書く紙は
此處にもあるものを。他人行儀うちすてよ。」とて、御机
の引出よりこれをば取出でさせ給ひ、御みづから墨お
しすり給ひて、こゝにある間は我が家の子ぞ。隔て心
もつな。とて、さも懐かしげにおほせられ候。御寫眞に
て御目にかゝりしとは異なり、御ものごしはさながら
の母様に御座候。

始めて御逢致したる従兄弟たちが物語聞き候に、何れ
もおびたゞしきさかしさにて、何事も能く御承知に候。
私よりはるか年下のものにて、學問はよほど上かと
思はれ候。この地の人はすべてこのやうにさかしき

にや。但しは伯母様御子たちばかりとりわきての發
明かは存じ候はねど、とにかく今までとは心得改め候
うて、十分勉強致候上、わざ／＼此の地に出し下されし
御恩報じも致すべく、落ちつき候上にてゆる／＼文差
上候はんなれど、無事着の御知らせかた／＼これのみ
申上候。

近邊の御友だちにもやがて文出すべく候へど、若し尋
ねに来る人候は、事なく着きし由御話下されたく候。
はなむけ賜ひし方へも宜しう願ひ上候。かしこ。

(二葉全集)

*
哲學者。東京專
門學校講師。京
都帝國大學文科
大學教授。明治
三十三年歿す。

三四 道

大 西 祝

月ならば指して云はんを、
花ならばとりても見んを、
月ならぬ月の光と
花ならぬ花のほひは、
さしていひ取りて見るべき
ものにはあらじ。

波やめば、音と消ゆれど、
風ふけば、木の葉と散れど、
散りゆかぬものこそ見ゆれ、

